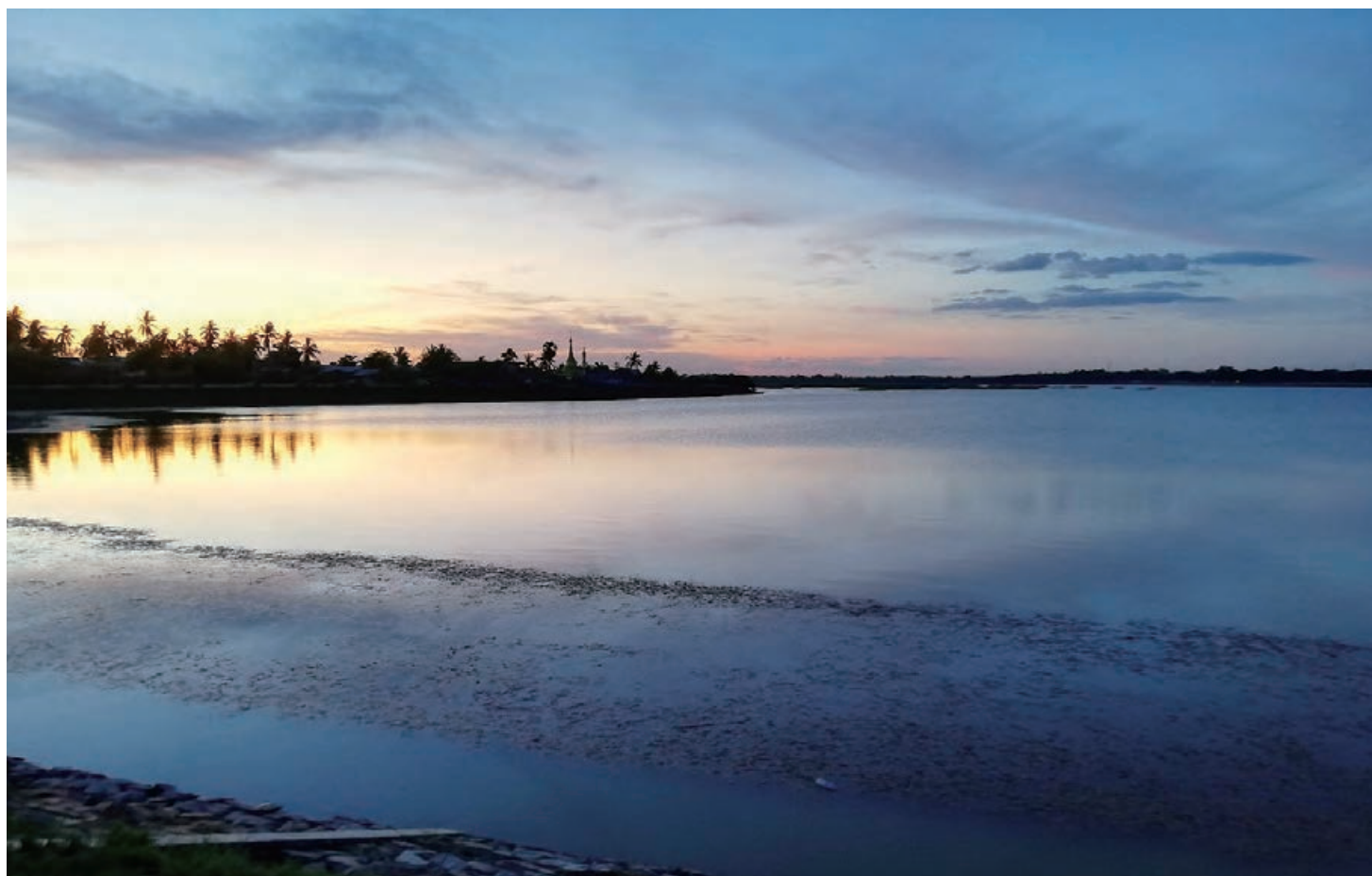


トヨタ財団
広報誌[ジョイント]
January 2025

No.47

【特集】Future :
若者と社会の未来

混沌とした様相を深める「生きづらい」社会のなかで、いま、未来を担う若者たちは、どのように明日を思い描いているのでしょうか。本誌連続特集「Future」の3回目は、若者たちの未来へ向けた活動の声をお届けします。





Presented by Ayako Kono

ミャンマー中部メティラ湖。夕暮れ時、たくさんの若者が明日への希望を語っていました。その後の政変で海外へ移住する若者が急増し、日本語能力試験受験者数も世界二位に。どんな状況でも食欲に学び、未来を希求する若者たちの姿に、襟を正される思いです。

CONTENTS

FIRST WORD ● 小平信因
新年のご挨拶 2

【特集】Future : 若者と社会の未来

【鼎談】伊藤敦紀 × 山本修太郎 × 伊藤達巧
いとこ5人の“楽しい”まちづくり 5

【鼎談】高橋健吾 × 永代友理 × 山田達也
人間とAIが共創する医療へ 10

【寄稿】品川 優
多様性を協働の源とする社会の実現に向けて 15

50周年記念特別サイト INFORMATION 18

私たちの取り組み——助成対象者からの寄稿
国際助成プログラム ● 岩井一郎
地域資産の発掘と社会的つながりの再生 20

国内助成プログラム ● 石田雅一
食で地域がつながる「おしゃべり食堂」 22

特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」● 北崎允子
対立を乗り越えるこれからの智慧 24

活動地へおじゃまします！〈愛知県知立市を訪ねて〉● 鷺澤なつみ
交流する機会の一つひとつの芽吹きに期待して 26

「私」のまなざし ④ 楠瀬慶太
市民科学で文化継承の課題克服 30

トヨタ財団ジャーナル 32
みんなと考えるメンタルヘルス2024「こころとことば展」ほか



公益財団法人トヨタ財団会長

小平信因（こだいいら・のぶより）

2025年の年初のご挨拶を申し上げます。昨年トヨタ財団は設立50周年を迎え、それを記念して、人間社会の50年後を展望する記念助成、日本とASEANの間の協力を主題とするシンポジウム、過去50年間の活動を振り返る特設サイトの開設等一連の事業を実施いたしました。ご協力をいただきました皆様に改めて感謝申し上げます。

第二次世界大戦から80年、世界は多くの困難な課題に直面しています。長年にわたり世界経済の繁栄を支えてきた国際秩序は崩壊の危機にあり、それにかわる新たな秩序への展望は未だ開けていません。SNSの急速な広がりや相まって民主主義国を中心に国により相違はあるものの国内の政治情勢は不透明さと不安定さを増し、中国やロシア等も国内に多くの問題を抱え、それらが国際情勢に大きな影響を及ぼしています。

一方ChatGPTに代表されるAIを始めとするデジタル技術の進展はすさまじく、一年前には不可能と考えられていたことが次の年には可能になっている状況と言っても過言ではありません。デジタル技術は既に経済社会や日常生活のあらゆる分野に深く浸透しており、今後もAIの急速な進歩が継続していくことが確実な中、一部識者が唱えるように2045年がAIが人類を超える「シンギュラリティ」となるかどうかはともかく、遠からず人類は「果たして人間とはなんであるか、人類はAIを使いこなして行けるのか」との根源的な問いに向き合うことになるのではないかと思います。翻って日本をみると、1991年のバブル崩壊から長く続いた停滞からようやく脱出しつつありますが、この30年の間に日本の国際的な地位と競争力は大きく低下し、「先端技術国日本」のイメージは消えました。昨年11月にスイスのIMDが公表した世界デジタル競争力ランキングでは、日本は対象67か国・地域中31位の評価でした。デジタル技術を生かすためには既存の仕組みや仕事の進め方を大胆に見直しながら導入を進めることが必要ですが、日本でのそうした取り組みは遅れています。また、デジタル技術の展開においては問題が生じたら迅速に対応するという「利用しながら改善すること」が重要ですが、導入時のトラブルに耳目が集中し技術の利用自体を避ける傾向も見られます。

日本は本格的な「人口減少時代」に突入しました。現在1億2400万人の総人口はこのまま推移すると年間100万人のペースで減っていく、2100年の人口は6300万人、高齢化率は40%を超えると推計されています。人口が減少して行く中で、これまで「当たり前」と考えられていたことがどんどん当たり前ではなくなっていくことが予想されますが、既にその一部はさまざまな分野や地域で現実の問題として顕在化しています。そうした状況の下、希望のもてる持続可能な日本を次世代に引き継いでいくためには、これまでの思い込みから脱却し、既にそこにある現実とこれから起きるであろう「不都合な真実」を直視し、長期的な展望をもって早め早めに手を打っていくことが求められます。

「人への投資」を抜本的に拡充して人材を育て社会全体として継続的に付加価値を高めること、さまざまな制度や仕組みを見直しつつデジタル・AI技術を最大限に有効活用すること、政府や地方自治体等公的部門のリソースの限界を認識し共助・互助を拡充していくこと、外国人材の活躍のための環境整備など、数多くの多様な課題に向き合い、知見や経験を共有しながら社会全体で柔軟・迅速に対応していくことが重要になります。

こうした問題意識に立つて、近年トヨタ財団は、国内助成における「新たな自治型社会」のテーマ設定、「先端技術」特定課題と「外国人材」特定課題の創設、人材育成を目的とする東京大学未来ビジョン研究センターとの協働プログラムの開始、2024年度からの「人口減少」特定課題の創設、非営利団体間の知見・経験共有のためのネットワークのハブ機能としての試みなどいくつかの新たな取り組みに挑戦してきました。

常に変革を続けてきた50年の歴史を基盤として、本年からトヨタ財団は、次の50年に向けての歩みを始めます。トヨタ財団は一貫して未来志向の助成・活動を行ってきていますが、これからもより一層の社会への貢献をめざして、先見、先駆、先導という理念のもと常に先取りをした助成・事業活動を行って参ります。今後とも皆様の厳しくも温かなご指導とご鞭撻をいただければ幸いです。



Itou Atsuki

伊藤敦紀

Yamamoto Syutaro

山本修太郎

Itou Tatsuyoshi

伊藤達巧

【特集1】国内助成プログラム鼎談

いここ5人の“楽しい”まちづくり

2023年度国内助成プログラム

「危機感・課題意識だけでない、町場の資源を
面白がることから始める地域の自治」

一般社団法人HiCO-BAY(ヒコベエ)

<https://hico-bay.com/>

聞き手 ● 武藤良太・鷲澤なつみ(プログラムオフィサー)

——最初に、自己紹介をお願いします。
山本 山本修太郎です。山本家の長男27歳で、この3人の中では一番年下です。
高校までこの香美町で過ごし、大学進学で神戸に出て一人暮らしをし始めたので、そこからちょうど10年ほど町を出ている状態です。大学を卒業したあと、東京郊外のまちづくりや創業支援などをしているベンチャー企業にしながら、将来地元に戻ってきたいということを考えています。今は力をつける修行期間として、東京で働いて社会人6年目になります。
伊藤敦紀 伊藤敦紀と申します。伊藤家次男です。僕も同じく高校を卒業する18歳まで香住にいて、京都の大学に進学してそのまま就職し、8年ほど町から出ていましたが、Uターンして帰ってきました。
大学で語学を勉強したので、海外の方と関わる仕事がしたくてホテル系の会社に就職し

本プロジェクトは、2045年に人口が現在の約半数になる見込みである兵庫県香美町での20〜30代前半の若者たちの前を向いたチャレンジです。今回は2021年に統廃合(閉校)となり、昨年10月のスクランブルというイベントの舞台となった香佳第二中学校で、自分たちの地域や日本社会の未来に向けた想いをうかがいました。

【特集】

Future

若者と社会の未来

混沌とした様相を深める「生きづらい」社会のなかで、いま、未来を担う若者たちは、どのように明日を思い描いているのでしょうか。トヨタ財団設立50周年を記念した本誌連続特集「Future」の3回目は、助成対象の現場から若者たちの未来へ向けた活動の声をお届けします。

わたしたち人間の一人ひとりにとって、未来はいまの生活の連続線上にあります。ですから、未来を思い描くには現在の自分たちの身近な暮らしのあり方を問い直すことから始める必要があるでしょう。そしてそれぞれの活動や考えを社会に向けて発信し、できるだけ広く共有、協働していくこと。また、何より、自分たちの発想や行動それ自体を楽しむこと。そんな地道な実践のなかからこそ、明日の社会へのヒントや希望の種が見つかるものなのかもしれません。

「未来」という言葉そのものが不透明さを増しつつある現在、トヨタ財団は、「今」をよりよい明日へとつないでいくための、持続可能な活動のあり方を模索する若者たちの支援をつづけていきます。

て、そのあと人事に異動し、いろいろ思うことがあって辞めて、特に目的もなく帰ってきました。今は個人事業として、グラフィックデザインやウェブデザイン、そしてカメラマンの仕事と、かばんや財布などの革小物を手縫いで作るようなことをして生計を立てています。

伊藤達巧 31歳、伊藤家長男で初孫です。

僕は1回も地元から出ていません。高校卒業後進学した短大も家から通えるところだったので、31年間ずっとこの田舎に住んでいます。幼稚園教諭の免許を取って7年間保育園教諭をしていました。今は町の移住相談員をしています。あと、アウトドアが好きでずっとやっていたので、それが教育と結びついて、キッズキャンプのインストラクターやディレクターをしています。

——みなさんいと同じ土とことですが、い

とこ5人で団体を立ち上げているんですね。

山本 伊藤家と山本家のいとこ5人で3年前に一般社団法人を始めました。

達巧 団体名はヒコベエというおばあちゃんちの屋号から取ってHICO-BAYにしました。

山本 伊藤家は4人兄弟で、山本家は3人兄弟です。一番下の弟同士は同い年で、まだ大学生と仕事を始めたところで、この2人は今メンバーという感じではありません。です

ので、伊藤家の上3人と、山本家の上2人の5人でやっています。

僕の妹が5人の中では最年少で25歳。今は京都にいて、お花屋さんで働いています。僕たち3人が割とコアでやりたいことを考え

ちですが、妹は社交性と明るさが持ち味なので、イベントなどの実働部分では、いてくれると場が明るくなります。

達巧 はじめはそれぞれが町に思いを馳せながらも、それぞれの場所で働いていて、もやもやしたところとか、疑問に思ったこととか、こうしたらいいのになと思ったことを形にできるようにするために、法人化しようと言ったような気がします。

敦紀 結果的に、それぞれ会社勤めはあるとして、本当はもつとこういう仕事したい、たとえばうちの妹だと文章を書きたいとか、僕はもともと趣味で写真をやっていたので写真とか、本業では出せない自分のしたいことをする場所としても動き出した感じ

です。

ネガティブを逆転する発想

敦紀 HICO-BAY自体が、「なんか楽しいことをしよう」を合言葉にしています。仕事を選ぶときの基準として、ちゃんと自分たちが楽しめるかというところは一番大事にしているし、一番口になっています。今までの活動を見ても、自分たちは楽しんでいただけ、町に

対しての活動というのを押し出して2年間

やってきたら、来てくれる人は来てくれるけど、もともとそういう意識がある人にしか参加してもらいにくいところはあつて。

なので今回のスクランブルというイベントでは、なるべくそういうところが見えない形

せから全部入ってもらいました。一つはパン屋さんでもう一つは焼き菓子屋さん。どちらも数年前から関わりがあつて仲良くさせてもらっている開業3、4年のお店です。

なぜこの場所でお店をやっているのかというストーリーを、すごくしっかり持っておられる方々で、どちらも対面の接客をとて

も丁寧で、大事にされている方だったんですね。

僕たちがチラシを置かせてもらったり、何かイベントをしたいと思つたときに、チラシを見て来てくれるとか、SNSを見て来てく

れる人たちはだいたい僕たちの知り合いになっ

てしまつて、内輪ノリのようになつてしまうことがある。でも、そうじゃなくて、なんと

なくつながり合えている、香住のことを思っ

ている事業者の方が対面で接客するときに、今度こういうことをやるんですよとか、こ

ういう思いを持つて、一緒に準備をしてきたイ

ベントなんですよということを話してくれる

と、質のいいファンが増えていく。

この町を面白いと思っている人たちが、新

しいおしゃれなお店に行くから、そ

う人たちをムーブメントに巻き込ん

だり、新しい発想を持つてもらうた

めには、その人たちから言葉で伝え

てもらうのがすごくいいんじゃない

か。場所が決まつたあとからすべての

打ち合わせに入つてもらつて、どう

いうレイアウトにするか、どういう思

いを持つて伝えていくとか、そういう話

も全部一緒にした。結果的にイベント

が終つたあとも、そのときここに来



●山本修太郎(やまもと・しゅうたろう)

で、とにかく楽しそう、行つてみたいという気持ちで来てもらう。その先でまずは活動を見てもらい、もうちょっと踏み込んで、活動の

の中心や背景を楽しく読める紙媒体などクリ

エイティブを通じて、関心の輪が広がる。そ

んな感覚がこの「スクランブル」というイベ

ントというか、ムーブメントにおいては、一

番大事にしたいところです。

楽しそうだから、自分たちもこういう出店をしてみたいなとか、普段趣味で作っているものを売つてみたいな、と各々の自己表現を引き出せるような敷居の低さに今後持つていくことも、課題ではあります。みんなできつていくイベント

というのか、波ができたというの

のが一番ですね。

達巧 HICO-BAYとして初めからこだわっているのが、空きスペース、軒先、空き家、無人家……、そういうネガティブな言葉をポジティブに捉えるための活動というのが

ずつとあつて。

修ちゃんが、空き家の軒だけ借りてコー

てくれたお客さんが、そのパン屋さん、焼き菓子屋さんに今度こういうことをしたいとか言えるので、窓口がどんどん増えていくのが町にとつてすごくプラスになつたんじゃないかなと。そういう質のいいファンと、共感してくれる出店者の方、チャレンジしてみたい人がどんどんこれから増えていくことによつて、ネガティブを逆に面白がる人たちが増えていつて、結果、ちよつといいんじゃないのつていう思いが町の中に広がつていけば、少し

明るくなるんじゃないかなつて。

スクランブルの可能性を残しつつ

達巧 その2店舗が言葉で伝えてくれた人たちがSNSに流れてきて、SNSで僕たちが当日はこういう楽しみ方ができるから、こんなもの持つてきたほうが面白いよみたいなのを発信していたんですね。マルシェだけとか、食べて終わりというよりは、この場所をのんびり過ごすためには椅子を持つてきたほうがいいとか、読みたい本を読んでのんびりするのもOKだし、ボールを持つてきて遊んでい

た子どもたちもいました。あとは新聞ですね。

香住二中という校区の結構上の世代は、新聞

を見て来た人が多いと思います。

日本海新聞といつて、鳥取からこちら側の山陰に配布されている新聞で、香住エリアのコーナーに出してもらつたので、この地域の人たちは新聞を見て来ている。楽しもうと思つて来ている人たちは、SNSを見て来

ていて、地域外の人は、パン屋さんに行つてい



●伊藤敦紀(いとう・あつき)

たりというつながりで知って、来てくれたりが多いと思います。

—— いろんな背景の方が同じ場に混ざって、まさにスクランブル！

山本 マーケットが始まる前の10時ぐらいから来てくれてもいいんだよみたいな発信を添えたり、終わったあとは反省会をみんなで行うということも伝えました。出店者情報だけでなく、楽しみ方とか、今回のコンセプトみたいなことの発信に結構力を割いたのは良かったのかな。受け取り側は、単なるマルシェと受け取っている人もいると思うんですけど、もうちょっと大きなコンセプトも含めて受け取ってくれている人も結構いたのかなと思います。

敦紀 初回で期待値のずれがあると、2回目以降につながらないと思うので、過ごし方とか、ただのマルシェに見られないためのこまごました発信は、新聞の取材のときも、とにかく楽しそうに見えることを第一とし、どう過ごしてほしいとか、どういう場として捉えてほしいみたいなのは漏れないように伝えて、当日、本当に椅子を持ってきたくれた人もいて、その場を楽しみに来てくれたと感じました。

結構長いことしてくれた人もいた一方、大人はもっとゆつくりしたかったけど、子どもが帰りがたつたみたいなきもちもありました。過ごし方としては、してほしい過ごし方がしてもらえたなと思いつつ、次はもうちょっと元幼稚園教諭が当日子どもにツアーをするみたいなことをして、大人が安心してゆつくり

できる場みたいなのも、企画としてありかなと。

達巧 たとえば時間割を組んで、この時間は紙芝居おじさんが来る時間とか、そういう出店の仕方もありますし、お店は持っていないけどハンドメイドをやっている人や、コーヒーを淹れるのが好きなんだけど、人には出たことがないというような人には、僕たちが許可を取って臨時出店ができるようにするからやってみてよ、みたいな人が店舗を構えたりもできるハードルの低さを伝えていったり、なんでもありなのがスクランブルなので、今後はターゲットの年齢を決め打ちしていくのも一つだと思うし、そうじゃない、誰でも来られるのもありだと思うし、可能性をすぐく残しつつ終わった感じです。

平和の手触りを増やしていく

—— 今、地域でまさに実践されていますが、これからの日本社会の未来を見据えたときに、皆さんの考える、こういう社会になった方がいいなという思いや考えを一言ずつおうかがいできればと思います。

敦紀 この地域でいうと、「スクランブル」というムーブメントがもうちょっと浸透して、何かをやりたいと思った人が気軽に声を上げて発信したり、参加したりできるようになるいいなと思います。

具体的には難しいのですが、町が前に進む



●伊藤達巧(いとう・たつよし)

というか、前向きになるというか、一般的に見ると衰退しているような印象を受けるところを、もうちょっと前向きに捉えられるようになって、雰囲気として明るくなるようなのが最終的に目指したいところ。人口はどうしても減りますが、そういう空気感というか、雰囲気ができたらいいなと思いますし、そのために「スクランブル」も、ただ楽しいで終わるんじゃなくて、次以降は、もうちょっと踏み込んだところまで、ちょっとずつ自治をちらつかせながら、でも楽しさは担保しつつバランスを見て、その地域がちよつと明るくなるみたいなのが目標。個人的にはそうなりたいし、そうなるように担えるところは担いたい。

達巧 似ているところはあるんですけど、面白いとか楽しいって思う感覚を持った人が町に増えてほしいと思うし、日本にも増えてほしいかな。それがネガティブをポジティブに捉えるということだと思っています。

芸人さんがよく言うのが、芸人は芸人を面

白いと思ってそういう見方をしているから、この芸人さんが面白いと思うための頭の動かし方をするんです。間とか声の大きさとか会場の跳ね返りとか、そういうのを考えて見ると、どんどん面白くなっていく。町の使い方と似ているんじゃないかと思っています。

どう使えば面白いとか、こう捉えたら楽しいっていう、ちよつと頭をやわらかくすれば、なんでもポジティブに捉えられるし、ちよつとだけ明るくなってくるっていうことがある。そこには生活の余裕とか、気持的な余裕は必要なんですけど、面白いと思ういい方とか、楽しもうとする気持ちみたいなものを持った人たちが増えてほしいです。そういうふうに住掛けをしていきたいというところが、「スクランブル」とつながっているところだと思います。

山本 キックオフに関わってくれたパン屋さんが言っていたんですけど、飛躍していると



スクランブル当日の様子

思うけど、という前置き付きで、あの日、平和っていうのはこういうことなんじゃないかと思つたつて言っていたんですよ。僕的にはあまり飛躍してなくて、本当にそうだなと思つたんです。みんな平和がいいって思っていると思うんですけど、平和ってあんまり手触りのない言葉というか。でも、手触りがあつて、平和って感じられるということが大事なような気がしていて。そういうことを地域の、面白そうだからやってみようという実践を通してちよつとずつでも感じられるということの積み上げが大切。それ以上のことは、あまり要らないなというのを、そのことを聞いたときに思いました。

今回のプロジェクトを始めるときも、自分たちなりの自治みたいなことを頑張つて定義したつもりでしたが、やってみて、あらためて定義したことがそうだなと思うこと、もうちよつと認識をあらたにしたことと、それ

ぞれあります。

認識をあらたにした自分なりの定義としては、誰かにお願いされたわけではなく、いけれど、やっていることは、自治ということとしてしっくりくる。たとえばマーケットの反省会で、受付をやつてくれた小学生の子がまた次もやりたいって言ってくれたこと。今回、子ども向けに出ていたお店はなかったんですけど、こういう遊び道具が並んでいたらもうちよつと時間を楽しく過ごせそうとか、アイデアを言ってくれたりしたのもすごくいいなと思いました。課題主導型で子

どもの居場所づくりをやったわけじゃないですけど、結果的に子どもが自発的に何かやろうと思う場所になったり、時間を過ごせる場所になっていたなと思う。関わった子たちの将来を楽ししみだなと思う気持ちも出てきたり。

町のことに對しても、課題がこうだから誰かが役割を担わないといけないみたいな、町に興味を持つたときは、最初そういう動機だったんですけど、今はあまりそういう感覚がなくて。何か課題があるとか、お願いされているとかじゃないけど、楽しいからなんかやっているみたいなきもちが、今、自分としては、割と実感としてある。この感覚が日本社会みたいに広げていっても、同じことのような気もしています。当たり前に楽しいとか、誰かにお願いされているからとかじゃなく、ちよつと周りの人のことを気遣ったり、ちよつと地域のことに自然とアクションできているみたいなことの積み上げで、ちよつとでも地域が持続可能になったり、良くなったりするのかなという感覚があるので。

このプロジェクトをやっていないときより、やっているとときのほうが、平和に對しての手触りが、1人でも多くの人にちよつと増えているみたいなのをいろんな地域で積み上げていけたらいいのかなと思う。それが課題主導型だと、ぎすぎすする気がして、お願いされたわけじゃないけど、なんか楽しいからやっている。ぎすぎすせずに、そういう積み上げを重ねていけるかなという感じがするので、そんなふうなことを引き続きやっていきたいなと思います。



聞き手◎ 加藤慶子・寺崎陽子(プログラムオフィサー)

今回の鼎談に集まっていたいたのは、医師や放射線技師としての医療資格をもちながら、日本の医療が抱える課題に取り組んでいる3名の若手研究者です。彼らの助成プロジェクトは、彼らが学部生や大学院生の時に採択されました。共通するのは、AIなど先端的なデジタル技術を用いて医療現場に変革をもたらそうとする挑戦的な姿勢と、医療界への熱い思いです。

山田 初めまして。大阪大学医学部附属病院で初期研修をしている山田達也と申します。学部4年生の時から株式会社GramEyeという、感染症の問題に取り組む会社を立ち上げています。会社では、微生物検査の1つ「グラム染色」をAIとロボティクスを用いてアップデートする医療機器を開発しています。

永代 永代友理と申します。現在、東京大学で特任研究員として研究をしています。

医学部を卒業して初期研修医を2年行いました。そのときに現在の研究テーマである手術手技の教育支援に興味が湧きました。自分が外科医になることも考えましたが、外科医を支援する立場にまわりたい、そのような研究がしたいと思い、初期研修修了後に大学院に進学して研究を始めました。大学院を卒業

永代 そのでの説明可能性って、キーワードなんじゃないかなと思うのですが。

高橋 キーワードだと思います。

永代 そこが特に医療には大事ですよ。

高橋 そうですね。説明つまり言語化できない、医師や現場のユーザーがほんとに使えるものなのかということにも関わってきますし、誤解があるというインシデントにもつながってしまうので、そこはある程度明確な判断ができる情報を提示してあげないといけないと思っています。それは私が研究しているAIにも同じことが言えると思います。山田さんがAIを使い始めたきっかけはなんですか。

山田 私がAIを使い始めたきっかけは、検査技師の先生方のいわゆる「匠の技」を見たことがきっかけでした。感染症の原因菌の1つに、大腸菌と緑膿菌と言われる菌があります。同じ『グラム陰性桿菌』という分類で色素で染めるとピンク色に染まる菌なのですが、ペタランの技師から見ると、緑膿菌はちよつと長細くて大腸菌は太いそうです。私にはわからないのですが、長年菌を見続けていると、そういった言葉で表しづらい特徴を捉えられるそうです。実は、AIにはそういった言葉にしがたい特徴でも学習して判別できると知っていたので、AIを使い始めました。実際に研究ではペタラン技師に近い精度が得られています。

高橋 AIを現場の人に実際に使ってもらったときに、AIが何をいつているか分からない、みたいな、そういうブラックボックス的なコメントもありましたか。

してポスドクとして研究を続けているところ
です。

高橋 私は放射線技師の免許を取りましたが、東北大学大学院で医学を専攻して研究をしています。おふたりとの共通点は、先駆的な技術と人間のつながりを模索されているところなのかなと思います。

研究テーマは、AIを使い放射線画像の診断支援システムを作ることです。AIに興味を持ったきっかけは、学部時代に配属された研究室にありました。当時、指導教員が「医療とAIを融合させた研究を始めたい」と熱意を持っておられ、その新しい挑戦に共感した私は、医療者でありながら未知の分野に飛び込んでみようと思えました。その結果、AIを医療に応用する研究の魅力に気づいたというところですよ。

説明可能性というキーワード

山田 永代さんに質問させてください。手術手技については、私も救急でやっていますが難しいですね。感染症内科を目指しているの自分には関係ないかなと思ってしまう部分もあります。誰にどのレベルの教育を届けたいかというターゲットは決まっていますか。

永代 私が今つくっているアプリの目的は、指導医の動きを完全に真似できるようにすることなので、一番そのモチベーションがあつてマッチしているのは、手術を行う診療科に進んだ、専門医取得を目指す専攻医以上だと思います。

ただ、本来の目的はそこにすべきなんだろうなと思う一方で、たとえば医学生や初期研修医にこのアプリを提供して、自主練的な使い方もしてもらっています。実習時間の中で、自分のペースで文章を読みながら動画を確認して練習していただきたいと提供したら、みんな真面目に取り組んでくれて、実習の30〜45分くらいで想像を上回って上達するんです。具体的に言うと、糸結びをするとき、医学生や初期研修医の外科系を目指す人は、とりあえず糸が結ばれていればいいでしょうみたいな感じだと思えます。その認識でもその人のその後のキャリアにとっては、あまり影響を与えないと私も思いますが、このアプリで学習することによって、実は外科の先生は結び目を送るときに糸の加減をこう調整してきれいに送っていたんだみたいなことを知って理解したら、誰でもできるんですよ。

高橋 そういう手技の教育は、熱心にコア技術や技の部分まで教える指導者もいれば、必要最低限の内容に留める指導者もいて、結構ばらつきがありそうですね。そこでそういうプロフェッショナルな知見をガイドライン化して、手技をまねるようなもので研修医を指導する。単なる教科書的なものではなくて、医療現場で活かせる「感覚」や「直感」に基づいた指導がもっと増えれば、より実践的な学びが得られそうですね。医者としてプロフェッショナルなことをしているという意識やプライドが刺激されることで、知識や技術の吸収にも繋がってくるのかなと聞いていて感じました。



● 高橋健吾(たかはし・けんご)

2023年度 特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」助成対象者。題目は「マルチモーダルデータを用いた、トランスフォーマーベースの疾患予測深層学習モデルによる支配的因子の特定と臨床応用」。

山田 ブラックボックスと思う事もあります。いま言った通り、AIは人間の言葉では表現しにくい特徴を捉え、学習し、判断に使う事もできます。たとえば、COVIDの抗原反応であれば、物質的な反応性を見ているという仕組みを医療者が知っているので結果に納得できるのですが、画像解析のAIの場合、なぜAIがその判断をしたのか知ることができません。

そこを、どう伝えればユーザーが安心・納得して使ってもらえるのかは、まだ悩んでいるところです。

高橋 たぶんみんな探り探り、自分たちの独自の解析も織り交ぜつつ説明可能性を定義していることが多いのかなと思います。代表的なものはパラメータの勾配をヒートマップで

山田 それで答え合わせができる。

高橋 確かに。

山田 だから、AIはスクリーニングにおいては医者側からすると役に立つけど、確定診断をAIがやってしまうのはまだ難しいのかなと。

高橋 AIが医師に代わって確定診断まで行うのはリスクがありますし、やはり最終的な判断は人間に委ねられるべきだと思います。AIはあくまで医師をサポートするツールとして機能するのが理想だと思いますね。

AIを中心に応用できる 社会システムを

——日本の医療界の未来を考えていくときに、今後こうなっていきたいとか、こうあるべきなのではない点がありますか。

永代 私は、手術をする人に対しての目線になってしまいましたが、やはりこれまでは、少し表現がきついかもしれませんが、自己犠牲によって成り立っていたところがあった。診療科の特性上、長時間労働になりやすかったり、手術を行う人として一人前のスキルを身につけるのに時間がかかってしまうというのは、これはもう致し方ないことだとは思いますが、そこにどうしても自己犠牲が伴ってしまう。それが最近、医師の労働時間規制が始まり、長時間労働によって診療を回したり、技術の習得を目指すようなこれまでの仕組みは無理があったということが明らかになってきました。そうすると仕組みは変えないとい

可視化して、色ごとにAIの注目度合いを人間が判定していたりします。また、私の場合は、外部検証をすることも説明可能性を研究する上で必要になったりすることがあります。病院Aで学んだモデルを病院Bで応用したときに使えるかどうかという検証が外部検証と言われるのですが、実際やってみると所見や構造よりも、病院間の撮影条件が違うところからはじまります。

放射線画像は病院によって撮影機械や撮影条件も違う。技師さんの経験による撮影の違いも出ます。それからコンピュータビジョン系だと学習する際に難しいのが、放射線画像で黒く写る空気などです。そこが値としてはゼロになるので、勾配と呼ばれるパラメータが消失してしまい、学習が進まなくなることが起こります。

永代 それって駄目なんですね。

高橋 黒いところに引っ張られてしまつて全然人体の構造を見ていないという話があるのですが、面白いことにそれでも精度が高いものがあつたりします。

論文を見てみると、きれいにここを見ているので信憑性がありますと書いてあつたりするのですが、たぶん全部の画像で同じヒートマップを出してみると、疾患と関係ない臓器や空気の部分を見て判断していたりすることが、私の経験上確実にあります。そうなったときに、医療者に提示したときに空気の部分を見て、これは所見があると云つて信頼しますかと。それなら、AIが判断したこと

に無理に診断が左右されるのではなくて、A

けません。

でも、やはり医師なので、自分のスキルが未熟で患者さんに迷惑をかけてしまうというのはすごく苦しいことですし、もちろん許されることでもないと思う。となると、これまでの、自己を犠牲にしながら時間をかけて手術を習得するという方法を変えないといけません。そのためにも、手術の習得をより効果的に、効率的に行えて、より多くの若手に手術に興味を持ってもらえるような仕組み作りに取り組んでいきたいと思っています。

——お二人はいかがですか。

山田 感染症の学問の歴史は意外と浅く、この20年ぐらいで教育が充実してきました。全ての医師が正しい抗菌薬の選択ができていくかというと、正直、なかなかできていない現状があります。だからこそ薬剤耐性菌という問題が出てきています。それなら感染症内科医を増やせばいいかと言われると、医師不足・偏在のため難しいです。

やはり技術を使つてサポートする必要があるのではと思います。すべてをAIが担える時代はまだまだ先かもしれませんが、その時代の一歩目を創っていききたいですね。

高橋 私の研究領域はAIと医療ですので、まずはAIの社会実装がテーマとなります。2024年はAI研究者がノーベル賞を受賞したことで、AIの社会的受容が加速し、半ば強制的にAIが社会に浸透していく未来が現実味を帯びてきたと感じています。そのような状況下で、研究のペースを一段と引き上げる必要性を強く意識しています。私は医学

Iはこう思っているのね、くらの感覚で医療者は捉えたほうが共創できる社会になるのかなと思っています。

永代 難しいですね。

山田 逆にAIのほうが人間より精度が高くなつてしまつたり、人間には分からないところをAIがたつた分析でできたというように、AIが人間を超えてきた場合は……。

高橋 ここ最近僕もそれを考えているのでよく分かります。

山田 言語化できないけれど、AIはこう言ってるからみたいなの。

高橋 人知をAIが精度的にも超えたときに、医療者の在り方はどうなるかみたいなのとか。

山田 それはそういう検査手法の一つだよねと受け入れられていく世の中にいつなつていくのかなと思います。

高橋 実際に現場で働いている方は、AIの精度が高かつたり、人知を超えてきたようなときにどういう反応をする人が多いんですか。

山田 内視鏡でAIが大腸癌があると言っているけれど、カメラで近くに寄つても人の目では分からないというようなことになれば、さすがにそれは医者としてはモヤモヤが残りますよね。難しいです。

永代 そうですよ。どうするんだろう。

山田 でも内視鏡の場合は、AIが言つたら組織を取つてきて病理で見ることがができます。

高橋 病理検査で。



● 永代友理(ながよ・ゆり)

2022年度 研究助成プログラム助成対象者。題目は「偏在から遍在へ——AR技術とICT技術を活用した、病院の枠組みを超え手技を三元共有する医療手技教育プラットフォームの構築」。

部で研究していますが、工学部の先生とコーヒーブレイクのような形でアイデアを共有することもあります。そうした場で「そんな面白いことをやっているのか」と興味を持たれる一方で、病院の診断医と議論をする際には「AI技術ってそんなこともできるのか」と驚かれることも少なくありません。工学系と医学系ではお互いに知らない領域がまだ多く存在しており、お互いの共通言語を増やしていくことがアカデミアが社会実装を加速させる上で重要なのだと思います。言い方はおかしいですが、病院側が工学部のシーズみたいなものの社会実装役になるようなイメージです。

もちろん、実際に患者、人間を扱うのでプレストのような軽い感覚で病院での社会実装はできませんが、眠っているシーズは確実

多様性を協働の源とする 社会の実現に向けて



2021年度 特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」助成対象
「相互メンタリングを通じた留学生と企業内人材の意識行動変容の調査分析と育成モデルの体系化」

◎ 品川 優（株式会社 An-Nahal）

「Japan as No.1」と言われた1990年に生まれ、ベルリンの壁崩壊、阪神・淡路大震災、アメリカ同時多発テロ、東日本大震災、アラブの春と、国内外のさまざまな危機や転換期を身近に感じながら人生を歩んできました。そんな私が株式会社An-Nahalを創業するに至るには、10代のころに経験した2つの出来事が影響を与えています。

1つ目は、高校生の時に難民の方と出会ったことです。ベトナム戦争から逃れてきた彼女は美しいアオザイ（ベトナムの民族衣装をまといながら、命がけで海を渡り日本にたどり着いたこと、彼女にとって第二の故郷となるはずだった日本で差別やいじめを受けたこと、外国人という理由だけで教育や就職の機会を十分に得られなかったことなどを話して

人と人を繋げ、可能性を広げていく

「若い助成対象者からみた社会の未来」というテーマのもと、30代半ばの品川優さんにご寄稿いただきました。品川さんは多様性を力にできる社会をめざし、仲間とともに20代で社会的企業を創業。それから5年足らずで数々の賞を受賞されています。活躍の原動力はどこにあるのでしょうか。原体験や社会の未来への想いを執筆いただきました。

未来を見据え共有していく

——最後に、それぞれの短期的、もしくは中長期的な目標、それからそれぞれにこういうところを期待しているなど、お互いへのエールみたいなことをお話しただけですか。

山田 この助成プロジェクトは、技師、医療者のアイデンティティとAIをどう受容していくかという調査をするものでした。実際に物を導入するのはこれから始まるところ



◎ 山田達也（やまだ・たつや）

2020年度 特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」助成対象者。題目は「海外薬剤耐性菌問題実態調査とAIを用いた細菌診断補助システムの臨床検査室への導入により利害関係者に発生する影響の調査」

で、研究の期間中は、あくまで装置を仮で見ていただいたり、オンラインで説明をするような架空体験に対してのフィードバックだったので、これから実際に導入されたあとに、導入する前のAIのイメージと、導入されたあとに徐々にどこまでAIが攻めていけば受け入れられるのかというところを見極める研究をしたいと思っています。

永代 短期的な目標は、1回つくって使ってもらったところなので、今回フィードバックを得たなかから次にどうしていくかという戦略を立て直して、どう変化させていいものをつくっていくかという、もう1サイクルをまわしたいと思っています。

中長期的な目標は、やはり手術手技の習得を今よりも指導医に依存せずに効率的に、そして標準化は難しいかもしれませんが、少なくとも日本全国どこに行っても質の高い教育、指導が受けられて、手術できるようにしたいという人のモチベーションを絶やさずに一人前の外科医になるまで育てる仕組みづくりです。それは技術だけでも限らなくて、その仕組みを含めて今の指導医、トレーニー双方に受け入れていただけるような仕組みをつくっていくのは結構の長い話だと思いますが、それに取り組んでいきたいです。

外科にもAIの波が来ていると感じますし、説明可能性というのが医療でAIを使うに当たってとても大事だなと個人的には思っています。先ほどおっしゃっていたAIが人間を超えた場合、超えるという定義も難しいですが、どう使っていくかみたいところは

本当にとっても難しいと思います。自分も頭の中で、たとえば外科だと究極的にはロボットが自動で手術をするような未来が本来に来るのかというようなことは、教育をやるうえで私も考えておかないといけません。エールというより自分の相談したいことになってしまいましたが、やはりそこは私だけで考えても全然答えが出ない、もちろんもとと答えがないですが、どうしていったらいいかというところを含めて、分野は違いますがこうしてお互い未来を見据えている者同士、ぜひ共有していけたらいいと思います。

高橋 短期的なことに限っては、第一に卒業することというのは置いておいて、自分の説明可能性のような、そういうスタンスで研究を進めていこう、そういう切り口でAIの研究をしているところなので、その知見の獲得と、技術や知識の習得が目標です。

中長期的な目標は、皆さんとは違ってまだ物ができていなくて、計算上の話で今も実験している段階なので、何かしらの物に落とし込んでみたいです。それは結構ハードルが高いですが、自分でできなくても企業の人と連携して大学に眠っている、自分のものも含めてシーズのようなものを社会実装してみたいなと常に思っています。

AIの説明可能性で言う主役になるのは理解する側だと思うので、自分の研究結果や知識を皆さんと共有して、今後もいろいろな面で関わられたらいいですね。

くれました。過酷な現実と直面しながらも前向きにさまざまなチャレンジを続け、自立した生活を送る彼女に感動したのと同時に、「日本で生まれ育った1人として恥ずかしい。どうにかこの状況を変えたい」と強い憤りと課



①(前ページ)研究機関、NPO、学生、日本企業の人事などが参加したシンポジウムの集合写真。②4か月にわたるプログラム修了式にてパートナーの留学生と日本人ビジネスパーソン。③インクルーシブリーダーシップワークショップでの振り返り。④モデルとなったスウェーデンでの移民向けメンタリング事業創設者とのパートナーシップ。⑤プログラム参加者が事後活動として主体的に始めた異文化理解ワークショップ。⑥助成を受けた異文化相互メンタリングプログラムが厚労省後援の日本HRチャレンジ大賞奨励賞を受賞。

題意識を持ちました。この経験が、日本社会に変革を起こしたいという思いの原点です。その思いを抱きながら、大学では国際政治学部へ進学し、社会を変える仕事を指すようになりました。そして、2つ目の転機が訪れます。それは内閣府主催の世界青年の船事業に、日本代表青年として参加したことです。13か国から集まった約250人の青年たちと、2か月間にわたり船上で共同生活を送



りながら、リーダーシップやお互いの文化、社会課題について学びました。圧倒されるほど多様な仲間たちと生活する中で、「お互いが違うからこそ、補い合い、新しいものを生み出せる」という実感が芽生え、多様性は分断の種ではなく、コラボレーションの源泉であるという考えに至りました。全身で体感して得たこの気づきが、多様性が「協働」の力となる社会を作りたいという、今に続く私のビジョンの原動力になっています。

こうして、日本企業での社会人経験を経た2019年、「多様な人材が協働する社会を作る」ことを目指して株式会社An-Nahalを創業しました。An-Nahalという社名は、日本語の「春」と、アラビア語で「ミツバチ」を意味する「An-Nahl」を掛け合わせた造語で、「春が来たとと言えるような新しい機会を創出し、誰かの才能を開花させたい」という想いが込められています。私たちは花粉を運び、花を咲かせるミツバチのように、人と人をつなげ、新しい可能性を広げていく存在でありたいと願っています。

相互メンタリングという新しい手法

私たちのプロジェクト「相互メンタリング」を通じた留学生と企業内人材の意識行動変容の調査分析と育成モデルの体系化」は、2021年にトヨタ財団のご支援を受け、2年間にわたって実践研究を進めてきました。先行事例として注目していた北欧の異文化メンタリングプログラムにヒントを得て、日本

は、研究室内のコミュニティが中心で地域社会とのつながりが限定的。また、奨学金などの制約から研究が優先され、日本語学習や就職活動は後手に回ってしまうことが多いのです。また、日本人の学生と同様に地方では機会格差がさらに顕著です。

相互メンタリングは、このような課題に応える手法です。日本人ビジネスパーソンは異文化環境で働く自信や意欲が高まり、実際に新しい業務に立候補したり、外国人留学生をインターンとして受け入れるなどの具体的な変化が生まれました。加えて、留学生の就職率も全国平均を大きく上回る68%に達し、日本語学習の意欲・能力もともに向上しています。初級者がプログラム参加後に日本語検定N2を取得した例もあります。これらの成果は、多様性を協働の源とする社会の実現に向けた一歩です。

インクルーシブな文化が育つ未来を

このプログラムをさらに広げ、①日本人が外国人材と働くことに前向きになり、その価値や面白さを感じられるようにすること。そして、そのような組織を自ら作るリーダー(インクルーシブリーダー)を増やしていくこと。②日本で働きたい外国人留学生が、ビジネスパーソンとのつながりを通じてその道を開き、社会の多様化が進んでいくこと。結果として、多様性を強みとして活かせる組織が増え、日本においてインクルーシブな文化が育つ未来を作っていきたいと考えています。

版として相互メンタリングという新しい手法を開発しました。多くの場合、外国人材の受け入れは彼らの適応に焦点が当てられがちですが、私はこれまでの経験から「受け入れる側」にも大きな課題があると感じていました。日本では、外国人材と学校や職場、日常生活で協働する経験が限られており、調査でも日本人の異文化環境で働く意欲は世界最下位。さらに、管理職の国際経験の少なさも世界最

下位です。経験がなければ意欲もわきません。それどころか、知らないものへの恐怖心が高まり、ますます消極的になってしまします。この連鎖を止めるために、「心理的に安心・安全な環境で異文化協働の原体験を創出する」ことが重要ではないかと考え、国内の大学に進学する外国人留学生とのメンタリングを提案しました。

外国人留学生も、日本での就職に向けて多くの課題を抱えています。政府が2030年までに留学生40万人を目指す掲げる中、実際に日本で就職できているのは全体の約35%にすぎません。特に修士・博士課程の留学生

50th Anniversary

50周年記念特別サイト INFORMATION

公益財団法人トヨタ財団は2024年10月15日に
設立50周年を迎えました。それにともない、
50周年記念特別サイトを作成し、現在公開中です。
本サイトでは1974年の設立から現在までのトヨタ財団の歴史や、
支えていただいた助成対象者をはじめとするさまざまな方々の声をお届けすると共に、50周年記念事業として開催したシンポジウムなどの
情報を掲載中です。ぜひ、ご覧ください。

CONTENTS

Next Stage

次の50年へ

「トヨタ財団のこれまでの50年、そしてこれからの50年」をテーマに、トヨタ財団会長の小平信因と同理事長の羽田正による対談を掲載。

Symposium

トヨタ財団50周年記念シンポジウム

「日本－ASEANの相互協力のこれまでとこれから」をテーマとして開催したシンポジウムの記録。

Overview

50年の歩み

トヨタ財団の過去50年間の歴史を背景となる時代状況を踏まえて、4つの期間に分けてご紹介。

History

ヒストリー

現在までのプログラムの変遷や、助成活動のなかで撮影した写真、理事・監事・評議員の一覧などの資料集。

Achievement

助成から10年の今と未来

過去に助成を行ったプロジェクトが、その後どのような形で花開き、現在の社会を支えているのか。その事例を掲載。

Grant

記念助成

トヨタ財団設立50周年の記念助成として〈50年後の人間社会を展望する〉をテーマに公募したプログラムです。応募結果などについては決定次第掲載していく予定です。

Achievement 更新情報



みんなの集落研究所

県境の暮らし課題調査から地域の自治で課題解決する仕組みづくりへ



鶴岡ナリワイプロジェクト

「ナリワイ起業」で女性が生き生きしながら小さなビジネスと社会貢献。1冊の本でつながった2人の活動



トヨタ財団50周年記念シンポジウム 「日本－ASEANの相互協力の これまでとこれから」開催報告

2024年10月25日、東京都港区にある国際文化会館にて、「日本－ASEANの相互協力のこれまでとこれから」をテーマとしたトヨタ財団50周年記念シンポジウムを開催しました。1974年の設立以来、トヨタ財団は国際的な助成活動を行ってきました。本シンポジウムは、現在まで継続的に助成の対象地域としている東南アジア諸国と日本の長期的な協力関係を振り返りつつ、未来に向けた新たな可能性を探ることを目的として行われました。

本シンポジウムには、主に2010年代以降に、東南アジアと関わるプロジェクトを実施した国内外の助成対象者を招待し、約100名の参加を得ました。シンポジウムはマクロな視点、ミクロな視点、議論の振り返りと総括、という3つのセッションで構成され、さまざまな専門と経験を持つ研究者や

ソーシャルセクター関係者が集まるなかで、活発な議論と意見交換がなされました。

最

初セッション「変化する国際情勢のなかでの日本・ASEAN関係」では、京都大学公共政策大学院教授であり、トヨタ財団研究助成プログラム選考委員長である中西寛氏がモデレーターを務め、チュラロンコーン大学タイ安全保障国際問題研究所長のポンピット・ブツサバーラット氏と神戸市外国語大学准教授の木場紗綾氏が登壇しました。

午後のセッション2「日本・ASEAN諸国の協働による市民社会の推進」では、市民社会のエンパワーメントに焦点を当て、東京大学東洋文化研究所教授であり、トヨタ財団国際助成プログラム選考委員長の園田茂氏がモデレーターを務めました。メコン・マイグレーション・ネットワークの針間礼子氏、明治大学の藤本稜彦氏、ルジャック都市研究センターのエリサ・スタヌジャジャ氏が登壇し、トヨタ財団の助成を得て実施したプロジェクトを通じて得られた知見について触れました。

最後のセッション3「日本・ASEAN関係の展望・民間財団への期待」では、特に民間財団が今後果たすべき役割について総括的な議論が行われました。このセッションはトヨタ財団理事長の羽田正がモデレーターを務めました。中西氏と園田氏が各々モデレーターを務めたセッションを振り返り、国際交流基金理事の佐藤百合氏、笹川平和財団平和構築グループ長の中山万帆氏が、日本とASEANの長期的な協力関係を深化させるためのアプローチや、民間財団の役割についてコメント

を述べました。

閉

会の挨拶では、羽田理事長から、トヨタ財団が今後も日本とASEAN諸国との協力関係を支援し、地域社会の発展に貢献していくという強い意志が示されました。

ランチやコーヒープレイク、夕食レセプションでは、参加者同士の積極的な交流が図られ、繋がりがさらに深まりました。また、志を共有する助成プロジェクト関係者同士の新たな出会いも生まれ、シンポジウムが今後の協力関係を深める一助となったことが確認されました。

このシンポジウムは、日本とASEANの関係を深く理解し、今後の発展のために民間財団が果たすべき役割を再確認する貴重な機会となりました。トヨタ財団は今後も世の中の情勢を見極め、先を見据えながら、国際的な観点から価値のある多様なアプローチでの助成活動を継続していきます。

*50周年記念特別サイトでは、シンポジウム当日に公開した国際助成を中心とするトヨタ財団の50年の活動を振り返るオープニングムービーの掲載や、写真ギャラリー、本報告の全文がご覧いただけます。



50周年記念特別サイト

www.toyotafound.or.jp/service/50th/

私たちの取り組み——助成対象者からの寄稿

今号では国際助成プログラムから岩井一郎さん、国内助成プログラムから石田雅一さん、特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」から北崎允子さんにご寄稿いただきました。



2022年度国際助成プログラム
「助成題目」アジアの歴史都市における市民ワークショップ方式による潜在的な地域資産の発掘と活用——社会的つながりの再生強化を目指して——

地域資産の発掘と社会的つながりの再生 ——歴史的町並み保存NPOのアジアネットワーク

●岩井一郎（公益社団法人奈良まちづくりセンター副理事長）

国際交流活動とアジアのネットワーク

奈良まちづくりセンター（NMC）は、奈良県内の町並み保存を担う市民組織として1979年に設立され、1990年以降はアジアとの国際交流にも取り組んでいる。

国際交流を始めた当初、市民主体の町並み保存においてNMCはアジアの先駆者的存在であったが、多言語を駆使する国際性、援助を獲得する交渉力、多文化共存の視点など、交流の中でむしろアジアの組織から学ぶことが多かった。いつの頃からか、「学びあい」がNMCの国際交流活動の合言葉になる。政治的対立や経済的混乱の時期を幾度も乗り越え、30年以上に渡り市民目線の交流を続けたのは我々の誇りである。

NMCは初めて泉州を訪れ、彼らの住民ワークショップに飛び入りで参加し、中国で住民の直接参加によるまちづくり活動が始まったことに、強い感銘を受けた。

泉州のモデルプロジェクトは南音の継承を目的とし、劇場や楽器工房が集中する泉州旧市街と南部郊外の石獅を対象とする。石獅の児童たちが旧市街のプロの演奏家や楽器職人に南音を学び、地域間交流と世代間交流を誘発した。今後は、南音を介した社会的つながりが拡大し、幅広い町並み保存活動に昇華することを期待したい。

一方、パタンはネパール中央部の歴史都市で、王宮広場にある寺院や宮殿を初め、当地ネワール族の建築遺産が受け継がれる。伝統工芸技術が今に残り、歴史建築を精巧な彫刻や金属装飾が覆う。



ネパール・パタンの職人による木彫工芸

ここでは、カトマンズ盆地保存トラストというNPOがモデルプロジェクトを実施した。そのテーマは職人技術の記録ビデオの製作で、仏像の厨子を彫刻する木彫工芸と、ハンマーにより浮き彫りを打出す金属工芸の技術を記

NMCは早くから町並み保存NPOの国際ネットワーク形成にも取り組み、2013年にはアジア・ヘリテイジ・ネットワーク（AHN）を結成した。現在、マレーシア、インドネシア、タイ、ミャンマー、ネパール、モンゴル、カンボジア、韓国、中国、台湾、日本などの組織が参加し、SNS上での情報交換や国際会議の開催などの活動を行う。

アジアつながりプロジェクトの基本理念

アジアの町並み保存活動は一定の市民権を得つつあるが、経済発展に伴い再開発は加速し、歴史的町並みは依然として危機的状況にある。同時に、近代化の過程で町並みの基盤たるコミュニティは変質し、建築物の外観のみ保存され、生活文化の深みのない町並みが

録した。ネパールではカースト廃止に伴い職業選択が自由化された反面、工芸職人が激減したという。今後、伝統工芸の素晴らしさをアピールするビデオを最大限活用し、現代的な育成システムにより後継者確保が進むことを期待したい。

国際シンポジウムでのアジア全体の学びあい

当プロジェクト最大のイベントは2023年12月に開催したパタンでのAHN国際シンポジウムであった。これは、ネパール、中国、マレーシア、インドネシア、タイ、ミャンマー、モンゴル、韓国、日本から約60名が参加する盛大なイベントとなった。

日程は3日間で、初日にはネパール、ユネスコ、日本の専門家による基調講演とパタン旧市街の見学があり、2日目にアジア各地の活動報告を行った。最終日には、泉州とパタンからモデルプロジェクトの中間報告があり、参加者が各地域に根差した無形遺産などをテーマに意見を交換した。パタンの木彫工芸に挑戦するプログラムや即席での南音の演奏もあり、参加者はフェイストゥフェイスの交流を心から楽しんだ。

プロジェクトの総括とネットワークの未来

当プロジェクトは、コロナ終息後の国際交流再開の波に乗り、多大な成果を上げることができた。これは、泉州とパタンのNPOが、建築遺産など有形遺産の保存のみならず無形遺産に着目し、地域の多様なセクターを巻き込み主体的に活動したことが大きい。



中国・泉州の児童を対象とする南音継承活動

増える。生活感やにぎわいに溢れる「アジア的価値」をいかに再生するかが、課題として浮上している。

このため当プロジェクトでは、「社会的つながりの再生と強化」「潜在的な地域資産の再発掘と活用」の2点を基本理念とした。その理念の実現に向け、中国の泉州とネパールのパタンにてモデルプロジェクトを実施した。両都市の選定理由は、無形文化遺産など地域資産が豊富で、住民参加による保存活動の萌芽があり今後の展開に期待できるためである。

中国とネパールにおける無形文化遺産の継承

泉州は中国南部に位置する港湾都市で、8世紀以降海のシルクロードの拠点として栄え、伝統音楽「南音」を初め、有形無形の多彩な遺産に富む。町並み保存を担うのは泉州郷愁経済学堂というNPOである。2017年

中国やネパールという市民活動に関して後発の国々でも、意欲的なNPOが育ちつつあり、アジアの町並み保存活動の未来の可能性を感じる。シンポジウムでは、互いの文化的背景の違いを尊重しつつ、地域資産と社会的つながりを主題に対等な学びあいがあった。

一方、プロジェクトの各段階でAHN内外に広く参加を呼びかけたが、AHNの知名度は未だ低く、会員以外の参加が少なかったのは反省点である。町並み保存運動の輪をアジア各地に広げるためにも、SNSをフルに活用するなど、今後さらに活動のピーアールに努めたい。

トヨタ財団の方からは、近年日中交流の成功例が少ないと聞いた。NMCの中国訪問は福島原発の処理水問題発生直後であったが、フレンドリーな市井の人々との出会いもあり、幸い交流は成功裏に終わった。

「対立と分断の時代にこそ市民と市民の交流が重要」という理念を貫くべく、今後もアジアとの学びあいを続けたい。



AHN国際シンポジウムの主要参加メンバー



食で地域がつながる 「おしゃべり食堂」

●石田雅一（社会福祉法人呉竹会）

みまもりあうまち、児玉

埼玉県北部のまち本庄市児玉町。本庄市の中心部は、かつては中山道の最大の宿場町として多くの人や物が行き交った歴史があります。児玉町は本庄市に合併された地域ですが、もともとは養蚕のまちとして栄えた農村で、自然に人がつながりあう、異質なものの受け入れるやさしいまちだったそうです。

昔はあたり前だった地域の人のつながりや、ちょっとしたおせっかい。顔見知りがたくさんいて、困ったら声をかけあえるあたたかい空気。児玉には、そんな日本の懐かしい姿があります。しかし、近年の少子高齢化とともに地区の子どもは減り、暮らしを支える商店や施設も減るなか、人のつながりも希薄になっていきます。これまで以上に地域の人たちが主体となった、まちづくりが求められている状況なのです。

「児玉の森こども園」は、約65年前に地域の農家の繁忙期に子どもたちを預かる保育所と

して設立。その後、時代とともに専業農家は減り、保育の役割も、未来を担う子どもたちの成長をみまもる場へと変化していきました。現在は、こどもたちの「じりつときょうりよく」を保育理念に掲げ、自主性を引き出す「みまもる保育」というメソッドを実践。子どもたちの創造性とやさしさにあふれる姿が日々生まれています。

「食×おしゃべり」で人がつながり合う

「おしゃべり食堂」は、地域の人が集まり食とおしゃべりを楽しむイベントで、毎月こども園で開催されています。みんなで食事を作って食べることで、さまざまな違いによる壁がなくなり、自然とおしゃべりが生まれます。そのなかから、自分たちがつくりたいまち、やりたいことを自然と見つけて小さく実践していく、それがおしゃべり食堂です。

こども園では、子どもたちの力を伸ばすためのさまざまな工夫をしています。この特徴を「おしゃべり食堂」でも活かすことで、さ

ンドなど商店の方々、行政や地域団体など、地域の人たちは実に多様です。また、若い年代も多く、卒園児の小学生、近くの児玉高校の生徒さん、上武大学の野球部のみなさん、保育士をめざす学生など、世代を越えたつながりが、この場を支えてくれています。

保育施設を起点としたまちづくりへ

保育施設は、長年にわたり子どもをつうじて地域の関係性を築いてきました。これを生かした食の場をつくることによって、まちの人たちの新たなつながりや役割が生まれ、まちに必要なのは自分たちの手で作るという意識が育っていきます。そして、活動はまちへと広がり、日々の暮らしをゆたかにし、災害などの有事の助けとなっていくきます。

地域への広がり例

- ・食の場の広がり（イベント、ワークショップなど）
- ・災害対応力の強化（炊き出し、避難場所を知る、助け合う関係）
- ・空き家の活用による、お店や居場所づくり
- ・学校の授業や部活との連携による若者の参加
- ・高齢者の未病や介護への効果

全国の保育施設は、子どもの減少や施設の老朽化などによって統廃合が進んでいます。小さなまちでは子育ての環境がなくなり、人がいなくなることが危惧されています。



保育の特徴を活かす

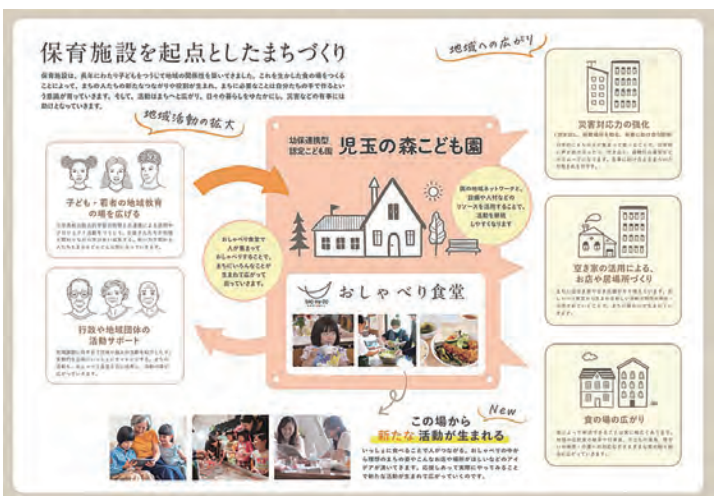
さまざまな出来事が生まれています。

①セミバイキング…園の給食では、食べる量を自分で選択します。自然にコミュニケーション

で決めた責任感から食べ残しも減るのです。おしゃべり食堂では、高齢の方は量が食べられない、子どもは苦手な野菜がある、など人による違いがあります。食べ物を大切にしなから楽しく食べられることに加え、他人のことを想像し思いやることにもつながります。

②主体性を大切に…保育の現場では、保育者が手を出さずに見守ることで、子ども自身が考えて決めていく力が育ち、たがいに協力するようになっていきます。おしゃべり食堂では、ボランティアさん一人ひとりがどんなことがしたいのかを考え、自分で毎回役割を決めることで、負担を感じず気軽にチャレンジを楽しむことができます。

③デイリークッキング…日々の給食では、0歳児から、発達によって調理に関わっています。さまざまな食材に触れることで好き嫌いなく楽しく食べられるようになります。おしゃべり食堂では、みんなで相談して食材からメニューを決め、協力して食事を準備します。年齢の壁を超えた会話が自然に生まれ、



子どもの成長には、自由度の高い環境や関わる人の多様性が必要です。保育施設をまちに開くことで、子どもたちにとってのゆたかな経験機会が広がり、まちの人たちとの出会いも増えます。まちには活気とつながり、新しい取り組みが生まれ、成長した子どもたちは、将来の担い手となっていくのです。私たちは、児玉の「おしゃべり食堂」から、こうした取り組みが社会全体に広がってほしいと考えています。



「おしゃべり食堂」については、上のQRコードまたは、<https://oshabely.net/> から詳細をご覧ください。

発想や経験の違いが化学反応を起こして、新しい発見がたくさん生まれます。

④異年齢保育…子どもたちは異年齢が関わ合うなかで過ごしています。他者との関わりは2歳くらいにならないと起きづらいと言われますが、園では0歳児から見られます。年下の子にやさしく配慮したり、年上の子を真似てみるなど、刺激と学びを得て、心も頭も育っていくのです。おしゃべり食堂では、高齢者はより元気に、若者は優しくなり、どちらにもプラスになるシーンがたくさん生まれています。

おしゃべり食堂を支えるみなさん

おしゃべり食堂は、地域のたくさんの人たちに支えられています。食材の提供、音楽や腹話術、テーブルを飾る花々、写真を撮ったり荷物を運んだり、関わり方は実に多様。新たな仲間を声をかけあい、お世話になってきた関係が生まれ、あたたかな循環が広がっています。



たとえば、元保育士のベテランお母さん、アコーディオンと腹話術が得意で場を楽しくしてくれるおばあちゃん、八百屋・農家・ガソリンスタ

対立を乗り越えるこれからの智慧



●北崎允子（武蔵野美術大学）

異なる価値観がある社会の中で

どうしたら、異なる立場や価値観の人どうしがわかり合えるか。

これは小さなグループから家族、組織、地域、国まで、大小さまざまな集団が抱える、永遠の課題かもしれない。専門性や立場、経験や習慣、信条や住んでいる地域が違えば、見えている世界が違う。いずれか片方の意見を採用すれば、もう片方は不当な思いをする。そうなれば、これまでの歴史でも示される通り、溝は深まり対立を乗り越えることはより困難になる。ここで必要とされるのは、価値観を無理やり一つにする指導力ではなく、異なる価値観を持った人間同士が集まって、どうにかして上手くやっていくための智慧である。いま私たちには、この新しい智慧が必要とされているのかもしれない。

私たちは、パーソナルデータの活用を異なる価値観の人々が共に検討する方法論を生み出すことを目指している。パーソナルデー

タの活用とは、氏名・住所・所属などの個人データに、日々のデジタルの利用によって生まれたデータを組み合わせるアルゴリズムが解析し、導き出した予測結果を個人や組織が用いることを指す。このようなデータ利活用が急速に進んでいるのは働く現場で、人事や労務管理に関するアプリケーションが普及し始めている。たとえば、特定の職種や部門が求める「ハイパフォーマンス社員」を、従業員の行動データと実績のデータを掛け合わせて定義し、若手の育成に役立てるといった活用がある。

一方、私たちが行った調査では、従業員は組織によって取得された自身のデータが、どのように使用されているかよく認識しておらず、また、データから利益を得る者が誰なのかも伝えられていないケースがあった。ある組織では、従業員がデータの使用を許諾する規約書に、意図的に不明瞭で難しい専門用語を使用し、同調圧力で同意を得るような例もあった。ここには明らかに、データを提供

する従業員と、従業員のデータにアクセスする組織側との間の力関係に不均衡がある。

また、組織内には抑制派、推進派、政治主義、実態主義、諦め型、不安型など、データ利活用に対するさまざまな立場や見解があった。しかしながら、社内でも話し合いを持つことはせず、対立は静かに深まっていた。

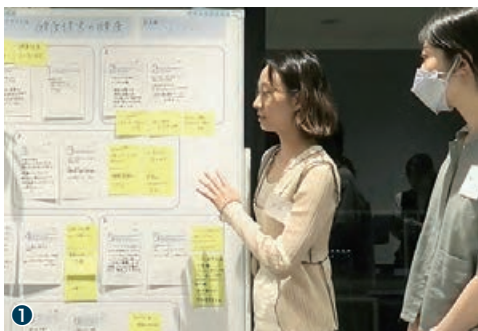
対立を乗り越える二つのワークショップ

こうした対立を乗り越える方策として、これまで私たちは、二つのワークショップを実践を通じてきた。ワークショップとは、参加者の主体的な参加を尊重し、言葉や体や心を使って相互に体験し合う、集団による創造と学びの場である。一方的な知識伝達ではなく、参加者が自ら参加・体験・創造して、共同で学ぶスタイルで進む。ワークショップの中で人々は、社会的立場が違っても対等で、価値観の違いがあってもそれを創造を通して学び合うことができる。

一つ目のワークショップは、組織のデータ利活用における不均衡に関心と当事者意識を持つためのものだ（写真①）。参加者はデータ利活用の基礎的な知識や事実を学んだ後、未来に起きるかもしれない架空の出来事を綴った小説を書く。その後、ストーリーに賛成・反対する点、その理由、本来はどうあつて欲しいかを、参加者同士で対話する。データ利活用によって自分の息子が上司になる話や、他人のデータを揶揄する「データジョーク」が巷に溢れる世界など、ユニークな小説に批評や議論が笑いと共に巻き起こ

り、最後に参加者たちは、責任を持ってデータ利活用に関わりたいと語ってくれた。

もう一つは、異なる立場・価値観を持つ人たちが相互に理解し、対立を乗り越える方策を皆で話し合うワークショップだ（写真②）。データを渡す一般社員、システムの制作・保守・加工に関わるエンジニア、データ解析の結果を活用するマネージャー、法務関係者、経営者といったステークホルダーが集まり、演劇を作り演じる。



ワークショップの様子

新しい智慧を広めていく

これらの経験から、対立を乗り越えるためのこれからの智慧を考えてみたい。

一つは、頭ではわかっていないが、身体でならわかることもあるという認識である。他者の価値観やそれに至る経験を文字や映像などで知ることでも

きる。だが、身体を使って、声を出して他者の役を演じることで、初めて深くわかることがある。また、自分に似た役を演じることで自分自身を発見することもできる。演技前と後の人は別人である。身体でわかることの潜在力は果てしない。

もう一つは、笑いや楽しさの効果を認めることである。人と密に関わるワークショップには、いつも笑いがある。笑いが起きること、社長と平社員も、年寄りと若者も、一氣に対等になる様子を見てきた。イスラエルとパレスチナの国境で、いわゆる変顔をしたイスラエル人を撮影した写真をパレスチナ側の壁に貼り、その逆も行う写真家を知っているだろうか。国境を隔ててふと笑っている人たちがいる。笑いは、対立関係から全く違う次元の関係性に人々を瞬間移動させる。そこに両者の対話の糸口があるのかもしれない。

最後は、創造のための適切な足場を作る技である。参加者が創造を通して学ぶことがワークショップの前提であるが、参加者の多くは創造の専門家ではない。創造はある意味、勇気と気力のいる行動である。ワークショップをデザインする者は、それを支援するための道具とその操作の設計力が求められる。たとえばゼロからは難しくても、準備されたパーツを組み合わせることで創造が可能になる。人々の創造力を引き出す智慧、である。

二つのワークショップと共に、これらの新しい智慧をどう広めていくか。私たちの今後の大きな仕事である。

ワークショップのためにデザインしたツール例



PERSONA CARDS

調査から得られた9つのペルソナの特徴が書かれたカード。表側はプロフィール。裏側はデータ利活用にあつかわるその人の体験や考えが載っている。



WHAT-IF CARDS

未来に起きるかもしれない出来事発想するための「もし〜だったら」という問いかけが書かれたカード。ニュース誌と連動している。



NEWSPAPER

参加者がデータ利活用の基礎知識を得るためのニュース誌。国内外で実際に起きている事例や技術について学べる。



活動地へおじゃまします！ 愛知県知立市を訪ねて

交流する機会の一つひとつの芽吹きに期待して

◎鷺澤なつみ(プログラムオフィサー)

国人労働者の空き部屋への流入が増加し、団地全体の人口構造に特異な動向が見られることでも有名です。

また、知立団地内にある「知立市立東小学校」も、外国人児童の増加に伴い、平成10年頃より日本語教室が校内に設置され、現在では外国人児童の比率が約60%となっています。このような地域であることから、団地の自治活動を担う主体として外国人の方にも積極的に関わっていただくべく、団地に多く居住するブラジル人の方をはじめとした外国人住民にも団地の自治会に参加してもらったり、団地内の盆踊りもブラジルの方などが参加しやすいようにアレンジされたり、公と民の双方からさまざまな形で文化交流や関係性の構築が進められてきてはいますが、旧来からの日本人住民との融和は依然として課題となっています。

本プロジェクトの運営の中心を担う「特定非営利活動法人ACT」は、長年にわたり各地で市民参加型のワークショップを通じて「大田楽」を実施してきており、各地に「大田楽仲間」を育んでいます。「大田楽仲間」は、文字通り「大田楽と一緒にやる仲間」ですが、子どもや高齢者の居場所になったり、青少年を地域の担い手として育んできた、多様な人々の居場所や拠り所、人材育成の場として大きな役割を果たしてきました。「池鯉鮒大田楽」もこのような経緯を経て知立市にて誕生した大田楽であり、年に1回開催している「池鯉鮒大田楽」は、地元の「池鯉鮒大田楽の会」



2024年4月に開催された「池鯉鮒大田楽」の一コマ

〔訪問地〕
愛知県知立市

〔助成題目〕
2023年度国内助成プログラム
(2)地域における自治を推進するための基盤づくり
「多様化社会を繋ぐ地域の文化交流の場づくり」——池鯉鮒大田楽

みなさんは「多文化共生」という言葉から、どのような社会をイメージされるでしょうか。総務省によると、「多文化共生」は「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義されています。しかしながら、この「地域社会の構成員として共に生きていく」という状態に達するには、

まだまだ課題も多く、長い道のりを要するのが実態です。法務省の外局である出入国在留管理庁（入国手続きや在留手続きなどの問い合わせ対応等を行う機関）の資料によると、令和6年6月末現在、日本国内に在留する外国人は350万人を超え、過去最高を記録しています。そして、年々増加の一途をたどる外国人居住者の方々とその共生の在り方は、特に多くの在留外国人数を有する地域において、重要な問題となっています。

今回は、そのような地域の1つであり、在留外国人数が東京都に次いで2番目に多い愛知県の中でも外国人比率（人口に対する在留外国人の割合）が高いとされる知立市を訪れました。

歴史ある街で国籍を超えた仲間づくり

愛知県の中部に位置する知立市は、人口72000人弱の町で、古くから交通の要衝として知られ、江戸時代には東海道の宿場町（池鯉鮒宿）として栄えた歴史があります。自動車産業が盛んな地域で、名古屋市内からも近く、アクセスも良好なことから、ベッドタウンとしても人気がある地域です。

参加させていただいたイベントの舞台となった「知立団地」はまさにそのような流れを受けて日本住宅公団（現：UR都市機構）によって造成された団地ですが、2000年代に入ってから、日本人入居世帯の高齢化率が上昇するとともに、主に自動車産業等に従事する外

という大田楽仲間で立ち上げられた団体を中心に現在も活動されています。

今回のプロジェクトは、この知立市内で活動する「池鯉鮒大田楽の会」と日本各地で日本の伝統的な文化芸術の活性と振興を図ることを目的に活動する「特定非営利活動法人ACT」の関係者で組成されたプロジェクトチームが核となり、2023年度より知立市内を対象に、文化交流の場づくりを通じた多国籍による「大田楽仲間」づくりに取り組んでいます。

仮面を作ってリズムによってパレードしよう！

今回おじゃましたのは、「多様化社会を繋ぐ地域の文化交流の場づくり」の一環でこれまで実施してこられたワークショップの6回目にあたる企画「Percussion Workshop」仮面を作ってリズムにのってパレードしよう！です。会場となった知立団地内の集会場には、受付開始とともにたくさんの親子連れが訪れ、日本人とブラジル人の子育て世代（主に幼児）を中心に、全体で45名近い参加者がありました。ワークショップは、セネガル出身のパーカッション奏者ラティール・シーさんによるジャンベの演奏と、特別ゲストとして参加されていた三味線奏者の山尾麻耶さんとラティールさんの協奏（沖縄民謡、お面づくり、パレード（お面を付けてリズムに合わせて近隣の公園まで歩く）という3部構成で実施されました。

Percussion workshop
多様化社会を繋ぐ地域の文化交流の場づくり

Make masks and play with rhythm Percussion

2024年10月14日（月祝）13時～15時
Chiryu Housing Complex Assembly Hall C
知立団地集会場C
参加費無料
Participation fee: Free

応援ゲスト
三味線
山尾麻耶

仮面を作ってリズムにのってパレードしよう！

Latyr Sy
Djembe
player
from
Senegal

ラティール・シー
日本の西舞踊から
ジャズ・ロックなど多
様なジャンルの音楽に
対してパーカッション
を奏するセネガル出身
のパーカッション奏者
と共演。

主催 池鯉鮒大田楽実行委員会
公益財団法人トヨタ財団 2023年度 国内助成プログラム

申込お問い合わせ 池鯉鮒大田楽実行委員会 久世まで TEL. 090-9698-9456
Mail: chiryumusic@gmail.com

イベントチラシ



第1部の演奏では、はじめにラティールさんのジャンベの演奏を聴きました。想像以上に大きな音で会場に鳴り響くジャンベの音に、はじめは子どもたちとても驚いていた様子で、目を見開いて隣近所の人と互いに顔を見合わせていましたが、次第にラティールさんの柔らかな人柄と軽快なジャンベのリズムに魅せられ、自然と手拍子を取る姿も見られました。お次は山尾さんの三味線の音色（沖縄民謡）です。三味線の独特なリズムと山尾さんのかけ声に合わせて、その場でカチャーシー（沖縄民謡の演奏の際に合わせて踊られる踊り）を真似た踊りをみんなで見様見真似で踊りながら、沖縄の楽器とリズムを楽しみました。ブラジル人の方の中には、リズムこそ違いますが、サンバのリズムに近いものがあるのか、とても軽やかに三味線のリズムに合わせて踊られている方もいました。そして、最後にはラティールさん

のジャンベと山尾さんの三味線の音に合わせて、参加者みんなでその場で自由に踊ったり、手拍子をとったり、言葉の壁はありつつも、共通体験をすることで、場が温まってく姿が垣間見えました。

第2部のお面づくりでは、通訳の方が手順を英語で説明しながら、子どもを中心に、紙皿をお面に見立て、シールやモール、クレヨンやペンなどを用いて、お面づくりを行いました。制作にあたっては、ブラジル人コミュニティの生活支援をされているボランティアの方もサポートに入り、子どもたちの声に耳を傾けながら、お面に張り付けるパーツについて相談を受けたり、足りない材料がないか確認したり、お面づくりのお手伝いをしていました。どのお面も同じ紙皿を土台にしているわけですが、使うパーツによっていろんな表情を演出することができ、どのお面も個性にあふれ、子どもだけでなく、大人もこだわりの作品を時間ギリギリまで作られていました。そして、早めにお面が完成した人たちは、一足先に休憩時間に入っていました。その間もジャンベの音が集会場に鳴り響き、自然とブラジル人の参加者たちがリズムに乗ってサンバのステップを踏み、それを周りの参加者が手拍子で盛り上げ、参加者同士楽しそうに過ごされていた姿がとても印象的でした。

お面が完成すると、いよいよ第3部のパレードです。この日は季節外れの強い日差しが注ぎ、外に出て少し歩くと汗ばむ陽気でしたが、パレードの参加者は足取り軽く、各々に制作した個性豊かなお面を身に付け、近くの公園までジャンベのリズムや三味線の演奏に合わせて歩きました。集会場から公園まではおよそ150メートルほどでしたが、ラティールさんや山尾さんを先頭に、自分たちの作ったお面を身に付けて歩くという体験は、不思議と第1部や第2部では交わりが少なかった参加者同士の一体感を高めていたように感じられました。公園で遊んでいた人や団地周辺の方たちは、突然のことに驚かされている様子も見られましたが、遠巻きにパレードの様子を見ては笑顔で子どもたちに手を振ってくれていました。公園に到着すると、休憩時間同様に、参加者はジャンベと三味線のリズムに合わせてサンバを踊ったり、それを見ている観客や子どもたちが手拍子を送ったりするなど、大いに盛り上がりました。

当事者視点のサポートで共に地域を育む

今回のイベントの開催にあたっては、知立団地内に拠点を構え、知立団地に居住する外国人の生活支援を行っている「合同会社スタートアイズ」の代表を務められているミウラ・ダ・シルバ・クミコさんという方の協力がとても大きかったそうです。「合同会社スタートアイズ」のボランティアグループ「One day One life（学習支援やフードパントリー等を実施）」のボランティアさんたちが窓口役となり、少しずつ団地内の外国人居住者への情報発信や参加の呼びかけが可能となっているそうで、今回のイベントの実施に際しても、クミコさんのお声がけで参加してくれた方が多数おられました。

これまでプロジェクトチームで実施してきたイベントでは、当日にならないと来るか来ないかがわからなかったり、来ると言っていたのに来なかったり、突然連絡なしに来たり、次回以降の案内を送るために連絡先を訪ねても連絡先や名前を告げずに帰ってしまったりと、さまざまなハードルからイベントへの参加を通じて定期的な関係性を育んでいくことの難しさにも直面していたそうですが、クミコさんのように、当事者の視点を持たれた支援者の協力・サポートがあることで、外国人の方の（イベントに対する）心理的ハードルが軽減されたという点はとても大きかったのではないのでしょうか。

言語も文化も風習も異なる人々が、互いの違いを認め合い、地域の構成員として共に活動できるようになるまでには、長い期間を要するということは容易に想像できますが、今回のような種まきの活動がなければなかなか芽も出なければ花も咲きません。何気ない日常の中で、互いの文化や考えの違いに触れ、交流する機会が一つ二つと地域内に増えていくことで、地域を共に築いていく仲間意識が次第に築かれていくことの重要性を改めて認識させていただいた機会となりました。そして同時に、それは「多文化共生」という外国人と日本人という関係性に関わらず、現代の他者との交わりが減りつつある日本各地のローカルコミュニティにおいても同様に求められていることのようにも感じられました。

限界集落との出会い

過疎高齢化が急速に進む高知県は、その現状から「限界集落」という学術用語が生み出され、集落消滅に対する危機感を全国に発した地である。2007年、大学院生だった私は、歴史民俗の調査で故郷・高知県の山村を歩いた。古老が語る村の記憶の豊かさに衝撃を受けた一方で、多くの集落が消滅の危機に瀕し、繋いできた文化が継承されず、忘失消失していく現状を目にした。自分の持つ歴史学の知識でできることは「記録」だと考えた私は、調査地の全集落を歩いて120人の古老への聞き取りを行い、その成果を書籍『新・葦生嶺山風土記』花書院と論文（『限界集落化の歴史的プロセスに見る山村の未来』『政策経営研究』2009 vol.1）にまとめた。

調査の1年後、刊行された書籍を持つてある集落の最古老を訪ねた時、奥様から古老の訃報を聞かされた。奥様は渡した書籍を読み、「これで主人が生きてきた村の記憶が残る」と涙を流して喜んでくれた。「記録」の意義を感じた一方で、地域には「記録」を「継承」する次世代がないということも実感した。

また、論文は全国的な賞を受賞し、選考委員長だった経済学者の中谷巖さんから「限界集落の歴史や実情把握だけでなく、集落維持や地域再生を考えることがこれからの君の課題だ」とご指摘をいただいた。歴史学を学んだ者として地域のために何ができるのか。私は大学院修了後故郷に戻り、「記録」の先を追い求めて、地方紙の記者として徹底的に地域

たことは驚くべきことであり、地域協働の先例として学会でも注目された。

私の周囲では、調査研究は研究者が行うもの、市民は史料や情報を提供する協力者というような従来の科学研究の関係性ではなく、いつしか市民と研究者が役割分担しながら調査研究を進める市民科学（シチズンサイエンス）の実践が行われ、歴史学という学問が社会実装されていった。市民が、研究者の支援で「記録者」となり、記録した文化資源の価値に気付くことで、自ら地域や次世代に伝える「継承者」となっていく好循環が生まれている。現在の私は、「記録」の先にある「継承」を実現するためのツールとしての市民科学にたどり着き、そのノウハウをモデル化する試みを始めている。

「可視化」が拓く未来

近年、市民科学の広がり貢献しているのが、情報通信や地理情報システム（GIS）などの先端技術である。歴史学などの人文科学の大きな課題は、「記録」した文化資源情報が活字に限定され、デジタル化・オープンデータ化されていないため、ごく一部の人しかアクセスできず、「普及」されないことにあった。それが近年、OGISやGoogleサービスなどのオープンソースが提供されることによって、市民でも「記録」したデータを作成・公開して「可視化」することが可能になった。

トヨタ財団のプロジェクトでは、オープンリソースを使った市民科学による「可視化」の取り組みを推進している。ここでは、「高

「私」のまなざし
41

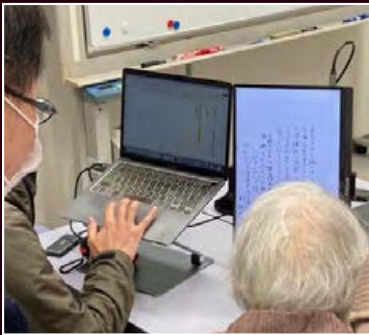
市民科学で文化継承の課題克服

写真・文◎ 楠瀬慶太

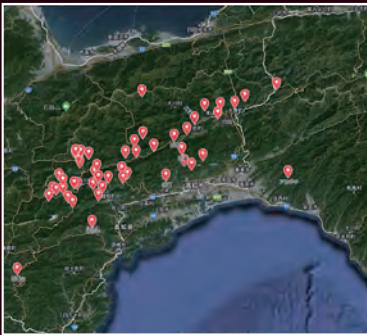
高知工科大学地域連携機構



事務局長を務める「奥四万十山の暮らし調査団」による集落調査(いの町)



事務局・会計を務める「高知地域資料保存ネットワーク」による歴史資料の翻刻作業(高知市)



GISを使った「アカダキ」地名の分布図(左)と四国山地の地滑り地の分布図(右、高木方隆・中村忠春・宮内定基1989「四国における地すべりの分布」『地すべり』26-3より転載)



土佐清水市・旧中浜小学校2階の見取図と保存環境調査機器の設置場所。廃校跡を利用した収蔵庫の温湿度変化や虫害の発生リスクを調査している。

を歩いてみることにした。

高知で広がる市民科学の実践

数百年にわたって引き継がれてきた記憶や史料の「記録」や「継承」が、なぜ地域で困難化しているのか。記者として地域を歩き、話を聞いてみると、少子高齢化によって次世代への「継承」が難しくなっていることに加え、郷土史団体の衰退、文化行政による支援の限界といった問題が深く影響していることが見えてきた。そして、課題の中でも、地域文化を資源として掘り起こし、記録して後世に伝えていきたいと願う市民と多く出会った。大学で学んだ歴史学の知識が、彼らの願いを実現する一助になるのではないかと考えた私は、休日を利用して、彼らと記憶や資料といった地域文化の「記録」活動を始めた。

仕事の合間にできることには限りがあり、院生時代のように自分一人で全て調査して成果をまとめることはできなかった。しかし、市民の皆さんと市民団体をつくり、「記録」活動を行ううちに、彼らが記録整理の方法論を学び、共に成果をまとめてくれるようになった。

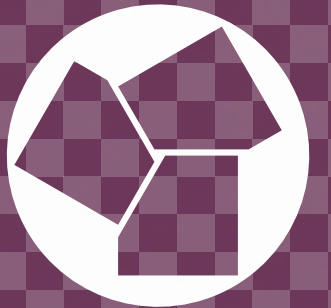
2012年以降の12年間で私が活動に関わった市民団体は12団体、刊行された調査報告書類は22冊と信じられないペースで、地名や屋号、民俗誌、民具、古文書、学校資料、村落景観、地域祭礼などの「記録」が進んだ。行政や博物館、大学の研究者も一部関わっているが、研究資金や専門性で劣る市民と在野の研究者を中心にこれだけの「記録」ができ

知工科大学フィールドデータベース」というホームページを、市民や研究者が関わった60を超える文化資源情報を公開するプラットフォームとして利用している。

たとえば、市民が自らの関心で崩壊地名「アカダキ」の分布を調べ、データ化して「可視化」すると、四国山地の地すべり地形とほぼ一致することが分かり、地名の「記録」が防災啓発といった「普及」につながっている。また、市民でも簡単に手に入るようになった虫害調査のトラップや温湿度計を利用して、廃校を利用した史料収蔵庫の環境調査を行い、環境データを蓄積することで行政に環境整備の必要性を「可視化」して訴える試みも行っている。

「可視化」は、人的な文化資源の知識の「継承」だけでなく、物的な「継承」にも大きな役割を果たすことが分かってきた。今後、「可視化」による文化資源の「継承」支援をモデル化し、高知県以外の地域でも実践につなげていきたいと考えている。研究者や行政に「継承」を支援してもらうのではなく、市民が研究者とともに文化資源に関わり、「継承」を実現していく。かつて文化資源を継承してきた地域力を取り戻す試みは、地域の自治という未来にもつながっていくと考えている。

◎楠瀬慶太(くすのせ・けいた)
2022年度特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」助成対象者。助成題目「デジタルプラットフォームによる地域の文化資源継承支援モデルの構築——市民参加型GISの実践活動を通して——」



REPORT



トヨタ財団主催シンポジウム
みんなと考えるメンタルヘルス2024
「ことばとことば展」

2 024年11月6日(水)に東京の丸ビルホールにて、トヨタ財団「みんなと考えるメンタルヘルス2024『ことばとことば展』を、オンラインウェビナーとのハイブリッド形式で開催いたしました。本イベントは、2023年2月22日に開催した「みんなと考えるメンタルヘルス『アスリート』と

いう生き方を事例に」の第二弾です。今回は、講演・トークセッションに加え、アスリートや著名人たちがよりよく生きるために大切にしていることばを紹介した「ことばのパネル展示」や、来場者の方たちに、展示やトークセッションでの「ことば」を受けて、感じたことや気づきを書いてパネルに貼っていた「来場者参加企画」も行いました。

当 日は、スポーツ選手、スポーツ関係者をはじめ、学生、企業の人事担当者、研究者、医療従事者などさまざまな方がオンラインも含め国内外から約250名が参加してくださいました。よりよく生きるために何ができるのか? 「ことばとことば展」をキーワードに、メンタルヘルスの専門家による講演やアスリートらによるトークセッションから、みんなで一緒に考えました。



登壇者のみなさまとトヨタ財団スタッフ

登壇者

- ・高橋美保(東京大学大学院教育学研究科 臨床心理学コース 教授)
 - ・小塩靖崇(国立精神・神経医療研究センター研究員(トヨタ財団助成対象者))
 - ・田中ウルヴェ京(スポーツ心理学者〔博士〕、五輪メダリスト/アーティスティックスイミング)
 - ・萩原智子(スポーツアドバイザー、元五輪日本代表/競泳)
 - ・廣瀬俊朗(株式会社HIRAKU 代表取締役、元ラグビー日本代表)
 - ・横田真人(TWOLAPS TC代表、元五輪日本代表/陸上)
 - ・サヘル・ローズ(俳優、タレント)
 - ・吉谷吾郎(クリエイティブディレクター、コピーライター)
 - ・和田拓(横浜キャノン イーグルス運営スタッフ、元ラグビー選手)
- 〈応援ビデオメッセージ〉
- ・室伏広治(スポーツ庁長官、東京科学大学特命教授、五輪メダリスト/ハンマー投げ)
- 〈閉会挨拶〉
- ・有森裕子(トヨタ財団評議員、五輪メダリスト/マラソン)

PUBLICATIONS

アニメと場所の社会学



2 022年度研究助成プログラム助成対象プロジェクト「趣味縁の場としての消費空間の可能性…アニメファン経験をめぐるメディア環境と都市の産業編成への複合的アプローチから」(代表者…松永伸太郎氏)より成果物として書籍出版されました。

現代のメディア文化の一領域としてのアニメ文化は、映像コンテンツそのものに注意を向けるだけでは捉えきれない現象となっており、日本国内外で多様な展開を見せています。本書では、そうしたアニメ文化を捉える切り口として「場所」に着目して、アニメと場所の関係について論じていきます。

アニメと場所の社会学——文化産業における共通文化の可能性

- 出版社…ナカニシヤ出版
- 編著者…松永伸太郎ほか

家庭医とゲストハウスオーナーが診るウェルビーイングな暮らし



2 019年度国内助成プログラム助成対象プロジェクト「暮らしつなげるまちづくり診療所プロジェクト」(代表者…新野保路氏)より成果物として書籍出版されました。

本書では生き生きと暮らす地域住民に、日々の暮らしや大切にしていることを研修医・医学生がインタビューし、そこから導き出された「健康の秘訣」について、日々地域住民の暮らしと健康に向き合う診療所の医師である新野氏が解説しています。

ただの事例集ではなく本当の意味での健康とは何かを探っています。本書には、地域活性化や地域医療に関わる人々の「地域住民の暮らしを支えるヒントが詰まっています」。

家庭医とゲストハウスオーナーが診るウェルビーイングな暮らし——地里山で生きる10人

- 出版社…暮らし診つける&つなげるまちづくり探検隊
- 著者名…新野保路、中谷翔

INFORMATION

2024年度特定課題の応募状況

昨 年秋に公募を行った2024年度特定課題にはたくさんのご応募をいただきました。応募件数は「先端技術と共創する新たな人間社会」では50件、「外国人材の受け入れと日本社会」では59件、2024年度から新たにはじまった「人口減少と日本社会」では38件の応募がありました。

それぞれの助成プロジェクトは、このあと外部の有識者からなる選考委員会による審議の上、2025年3月下旬に開催される当財団の理事会にて決定されます。選考結果は本誌またはトヨタ財団ウェブサイトでご案内いたします。

トヨタ財団ウェブサイト
toyotafound.or.jp





香美町での取材時に見かけたカニの爪。[N.W.]

【編集後記】
LAST WORD

品が生き残っていくためには重要なのだと思います(当たり前の話ですが……)。

今回新しい感動がなかったスマホは、そういう意味でそろそろ成長限界なのかもしれないと勝手に思いついて、今年1年、自分も何かひとつでも進化しなければと思うのでした。[N.K.]

●●● 今号では、特集記事の取材と久しぶりに「活動地へおじゃまします」を担当しました。国内の助成プログラムを担当していると、日本国内の様々な地域を訪れる機会に恵れますが、今回特集の取材で訪れた兵庫県美方郡香美町は、新幹線を利用していくと、東京駅から香住駅まで、片道6時間ほどかかる地域で、久しぶりの遠出の出張となりました。

香美町は、全国からカニを目当てに多くの方が訪れるそうで、シーズンには松葉ガニと香住漁港で水揚げされるベニズワイガニ(香住ガニ)が楽しめるそうです。そんな香美町ですが、人口減少に伴い、学校の統廃合などの動きも徐々に出てきているとのこと、色々と考えさせられる取材でしたが、取材をさせて頂いたHICO-BAYのみならず、

んの地域を思う温かい気持ちに直に触れ、これらが益々楽しみに感じられたひと時でした。

一方、「活動地へおじゃまします」では、愛知県知立市を訪れました。多文化共生の試みは全国各地で行われていますが、こちらのプロジェクトでは文化的な側面からのアプローチということで、今回はジャンベと三味線というコラボレーションの場におじゃましてきました。「歌」などは歴史や文化的背景が影響するものがありますが、「リズム」に乗るといふ行為は、国籍問わず、みんな即興で楽しめるということを改めて発見させていただいた機会となりました。取材にご協力いただいた皆様、貴重な機会をいただきまして、誠にありがとうございました。[N.W.]

●●● 昨年は財団設立50周年でたくさんの取材をさせていただき、懐かしい方々にお会いできました。今年はその最後の取材で地球の裏側、チリにおじゃまする予定です。50周年のウェブサイト同様、「JOINT」冊子、ウェブともに充実させてまいりますので、本年もどうぞよろしくお願いいたします。[N.V.]

● 新たな年を迎えるにあたって、先日4年ぶりにスマホを買い替えました。最近のスマホは性能・機能が大幅に進化していると聞いていたのでどれだけ便利になっているのかとワクワクしていました。ところが、いざ買い替えてみると、確かに反応はなめらかでスムーズになっていましたが、びっくりするような新しい機能はありませんでした。カメラ機能などは大きく進化しているように感じたが、そもそもスマホでそんなに写真を撮らないので、娘に言わせると完全に「宝の持ち腐れ」だそうです。

昔は製品を買い替えると、そのたびに大きな進化があり、それが買い替えの大きなモチベーションになっていました。たとえば車。初めてパワーウィンドウの付いた車に乗ったときはあまりの便利さに感動しましたし、ナビに至っては道路地図をいちいちチェックする必要がなくなり、助手席の彼女が暇そうにしていたのを覚えています。

また、生活まで変えてしまったのがDVDレコーダーの進化です。2週間分のテレビ番組が自動的に録画される機能ができた時は即買い替えたのですが、そのおかげですっかりリアルタイムでテレビを見ることはなくなっていました。やはり、常にユーザーの期待を上回る進化がその製

FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS

JOINT

本誌送付先の変更等がありましたら、右のQRコードを読み取ってお知らせください。



JOINT [ジョイント] No.47

発行日 2025年1月24日
発行人 山本晃宏
編集 トヨタ財団 広報グループ

発行所 公益財団法人 トヨタ財団
〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビル37階
[TEL] 03-3344-1701
[FAX] 03-3342-6911
[URL] <https://www.toyotafound.or.jp/>

編集協力 石井 泉
デザイン エディション・ヌース
印刷 文唱堂印刷

本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。

On The Journey
—旅の途中で—

5大陸13か国から集まった第22回世界青年の船事業参加青年の集合写真(P.15参照)
● 写真提供：品川 優





公益財団法人

トヨタ財団

THE TOYOTA FOUNDATION



公益財団法人トヨタ財団ウェブサイト
<https://www.toyotafound.or.jp/>



UD
FONT

